

中国人の日本語学習における母国（中国）の文化・習慣の影響について

馮 富榮

この研究は、主として中国人の日本語の断る意味の“いい”、感謝に用いる“すみません”及び敬語表現の学習を中心にして検討を進めた。なぜなら、これらの日本語表現が“思いやり”・“立場志向”を代表とする日本の文化・習慣と関っており、“率直さ”・“事実志向”を特色とする中国の文化・習慣と異なっているため、中国人がこれらの表現を学習する際には、中国の文化・習慣から影響されやすいと予想するからである。

以上の予想から以下の仮説が立てられた。

仮説1：断る意味に用いる“いい”と感謝の意味に使う“すみません”の学習は中国人にとって困難である。

仮説2：日本語敬語表現の使い分け基準の内、“上下”よりは“内外”のほうが中国人の日本語の学習の問題点となる。

以上の仮説を検討するために、質問紙調査を行った。実験群は中国にあるT国立大学の日本語専攻の大学生で、35名であり、日本語の学習暦は平均2年である。統制群は日本にあるN国立大学の大学生で、25名である。質問紙は6項目からなっているが、項目1から項目4までは“すみません”と“いい”の用法に関するものであり、項目5と項目6は日本語の敬語表現に関するものである。

調査の結果に基づいて、上の2つの仮説を検討してみた。仮説1の検討により、断る意に用いる“いい”と感謝の意に使う“すみません”は、中国人にとって学習しにくいことが明らかとなった。それが日本語の“いい”に相当する中国語の“好”はほとんど肯定の意味しかなく、また日本語の“すみません”に相当する中国語の“对不起”はほとんど詫びるときにしか使われないことに起因すると指摘された。仮説2の考察により、中国人は日本語の敬語表現を使用するとき、もっぱら身分の“上下”を基準にして尊敬語と謙譲語を使い分けられていることが分かり、日本語の“内外”を基準にした尊敬語と謙譲語の使い分けの学習が中国人にとってたいへん困難であることが検証された。そして、それは中国語の尊敬語と謙譲語との使い分け基準が身分または年齢の“上下”にあることに起因すると述べられた。よって、2つの仮説とも検証された。

続いて、なぜ感謝の意に使う“すみません”と断る意に用いる“いい”という表現は、中国語にはなく、日本語にはあるのかについて考察し、それは“立場志向”・“思いやり”を代表とする日本の文化と、“事実志向”・“率直さ”を特色とする中国の文化との相違に由来するものと論じられた。すなわち、こういった両国の文化・習慣の相違により、両言語の使用に違いが生じ、また両言語の違いにより中国人の日本語学習の問題点が生じたことが示された。従って、この研究により、中国人が日本語を学習するとき、母国の文化・習慣から影響を受ける可能性が確かめられ、中国人の日本語学習の問題点の原因所在が提示された。

*本研究は名古屋大学大学院教育学研究科の《教育心理学論集》1989年の第19号に掲載